

◆ 中途失明生徒の普通高校への復学

【事例の概要】

T男は昭和27年11月生まれで、小学校、中学校、昼間定時制高校と普通の学校に進んだが、昭和47年9月頃から視力の減退を自覚し、昭和48年2月にH大学病院において、多発性硬化症と診断され入院治療を行なったが同年8月、症状が一応落ち着いた事により退院、同年9月に再適応訓練のためにA高校を休学のまま、札幌盲学校に仮在籍の形をとって入学した。

T男の視力は、右—0.01、左—眼前手動弁（昭和48年8月）であった。又学力は、A高校において中位であり、運動能力は、平衡性に多少劣るところがあったが、上位に位置されたT男は、完全失明になるであろう自分の姿を知っていたが、それに耐え現在の自分を何とかしたいという意欲が旺盛であった。その事が本人にも、指導する者にもよい影響となって現われてきた。現在はA高校に復学し、昭和50年3月に卒業の予定であり、その後は高等盲学校の2部専攻科に進む予定である。

【診断と対策】

問題の所在 T男は簡単な漢字とひらがなは書けたが、視的フィードバックが難かしく、文字コミュニケーションは、点字によるしかなかった。又、長い入院生活で体力の劣えが目立っており、身体運動もどこか危なかしげであった。更にいつとは知れぬ失明にそなえ、予備的に眼遮蔽しての歩行、触知覚と手指の運動も指導する必要があるがあった。

指導の過程 指導の過程は下記の如く大きく4つの段階に区別する事が出来る。第1次指導と第2次指導は盲への対処、第3次指導と第4次指導はA高校への復学を目ざしての対処であった。

〔特例一三〕

指導段階	期 間	指 導 内 容
第1次指導	9月初～10月末	①国語点字の習得②歩行訓練③身体運動の再体制化④触知覚と手指の運動
第2次指導	S ⁴⁹ 11月初～2月中	①点字の触読速度の向上②点字教科書使用の教科学習③手指の巧緻性向上
第3次指導	2月中～3月中	①英点字②日常工具の使用③国語点字の正しい分ち書き④珠算⑤数字記号⑥英文タイプ⑦人生一般についての話し合い
第4次指導	5月末～6月中 (農繁休暇)	①体力運動機能向上②数字、理科記号、英略字③普通文字の読み書き④カナタイプ⑤英文タイプの強化

又、T男の指導にあたってはチームを組み、それぞれの専門を生かした指導をし指導記録を一括収集し、各指導者が自由に閲覧出来る方法をとった。

第1次指導 ①国語点字の習得＝触読難易と点字の形態から点字を4段階に分類し、易点字から難点字への方向に進みながら、それぞれ次の5 stepによる方法をとったのである。step 1→各段階に作成した点字シートと同じ内容を吹きこんである録音テープを使用し、各点字のイメージ化を促がす。step 2→同じシートを読み録音する。step 3→自分が録音したものを確かめる。step 4→同テープを聞きながら打字する。step 5→自分が打字したシートを聞きながらチェックする。尚、間違った所や解らない所はその都度指導した。

②歩行訓練＝9方向音源弁別、音の軌跡、歩行軌跡、歩行図、白杖操作、地区適応、単独帰省の7つの内容を指導した。ただし、単独帰省については、残有視力の活用により行なった。9方向音源弁別→訓練第1回から第3回までの27刺激中誤答13、訓練第8回から第10回までの刺激中誤答3つ、訓練第18回から第20回までの27刺激中誤答1つと、順調な伸びを示した。音の軌跡→9つのスピーカーを用いて音を流がし、9つのポイントで表わせるカタカナを、言いあてる事が出来た。尚、交差点モデル学習においても車の流れと信号の関係を理解できた。歩行軌跡→5本のベルトを組み合せ、20のコース（角度90°、45°、135°）を設定したが全20コースのレーズライター上での表現が出来た。白杖操作→にぎりⅠ.（平地における基本操作）、にぎりⅡ.（階

段昇り、障害物の確認等での操作)の指導を、地区適応の中で指導した。又、歩行図についても地区適応の訓練後、空間構成物を標識化した点図を作らせ指導した結果は、眼遮蔽しても学校近辺の白杖歩行が可能となり、点図は札幌市中央地区、南地区の一部という広い範囲の地図を作成するまでになった。

③身体運動の再体制化=T男が野球部に所属していたので、ボールを使用する運動を主に行った(サッカーのドリブル、キック、シューティング、ソフトボールのピッチング、バッティング、ゴロキャッチング、軟球のピッチング、ノック)が、持久力は劣っていたが機能は、大体前のレベルまで達したようであった。

④触知覚と手指の運動=バドゥーベグボード、スタンフォード・コオ式ブロックデザイン、大脇式知能検査器具を用いたが、バドゥーベグボードは中位、スタンフォード・コオ式、大脇式は良好な結果をおさめた。

第2次指導 ①点字の触読速度の向上=前記、点字の指導step 2～step 5を、短文を用いて指導した。結果としては、点字触読力検査、昭和48年10月20日偏差値46、昭和48年11月29日偏差値66であった。

②点字教科書使用の教科学習=4教科(国、数、理、社)について、中学3年生のクラスで点字教科書を用いて学習した。この事によりブレーラーの打点速度向上、触読速度の向上が促がされたようである。

③手指の巧緻性向上=プラモデルの完成図をサーモフォームで点図化し、組み立てさせたが、大体は理解し組み立てる事が出来たが細部については出来なかった。

第3次指導 ①英点字=国語点字と英点字のマッチングを行ない、次いで中学1年の英語の教科書を教材に指導した。結果は、英語の力が劣っているためか、アルファベットはすらすら読め、書けても単語の意味等については、はかばかしくなかった。

②日常工具の使用=ペンチ、ノコギリ、ドライバー、ハサミ、カナヅチ、の使用を指導した。

- ③国語点字の正しい分ち書き＝日本点字研究会編「国語点字」に基き指導。
- ④珠算＝クランマー式そろばんを用いて、加減乗除の基礎を指導した。
- ⑤数字記号＝浮き出し文字の記号と点字記号の対応を行なって指導した。
- ⑥英文タイプ＝高木式指導方法により、60ストローク位の速さであった。
- ⑦人生一般についての話し合い＝失明について、盲人について、盲人観についての話し合い。

この第3次指導を終了後、昭和49年4月にA高校の4年生に復学したのである。尚、T男が使用した教科書は、札幌盲学校の職員が分担して点訳した点字教科書を使用した。

第4次指導 ①体力、運動機能の向上＝ランニングを主とした。

②数字、理科記号、英略字

③普通文字の読み書き＝ひらがな、カタカナ、小学校1年、2年配当漢字の読みと書き

④カナタイプ＝英文タイプをやっていたのか、この期間中でマスター

⑤英文タイプの強化

結果 A高校における前期テスト結果は、中程度であった。

学習方法は、①点訳教科書の使用、②教科担任が作成した録音テープの使用、③テスト、論文についてはカナタイプライターの使用、④拡大文字、図の使用、の4点になっているが、十分なアフターケアが出来ないために種々の問題も出て来ている。

①数学における持続した計算、式変形、原理の図解

②理科における実験、模型

③体育における、体から離れる道具を用いた教材

④板書、オーバーヘッド等による図、式の説明

ではあるが、A高校の担任が言う如くに「これらの問題点があるにはあるがそれは仕方のない事であって、T男のこれからの生活、又他普通生徒への影響を考えると、引いてもなお余りある事ではないだろうか」と言うのがまとめである。

(鈴木重夫)